



源氏辨了物

十五





九曜文庫

夕勢

等為卷の源氏五十歳に八月より終り十二月まで
とささり終まに八月十八日終りてとささり

中の人れをささりてゆきありまよふ

^{作云}夕雲の儒をよして心を盡してみ歎くまは

よきことねんあつて歎かはらうよふあは

と也儒をささりてまよふ人ぞ恐る

こと

中の人れをささりてゆきありまよふ

け物信のあまきうかの夕雲れ文と事のだらせ

トテラ 戸寺八家 上野寺 大長洲 上野下 米屋院 上野小

三滝 勝栲院 草生 尼三城 佐玉

野村 井出 小弟子

山崎 小野

辨別 柏木控

清慎公實頼 致仁 寛平御女

教敏少将 兼人 天慶元 壬午 壬午 年 母 時 平 臣 實頼 本 准

日 狩 狩 子 代 打 合 合

もの

我の

後 曹云

夢 大霧 遇 道 遺失

夕 暮 山 海

小野 庄 小野 佛社

賀 上 下 社 栗 野 野 菰 倉 上 栗

田 出 雲 卿 今 案 山 城 國 愛 宕 於 日 小 野 上 交

後 領 也 栗 栖 野 卿 下 社 領 也 寛 仁 後 一 條 二 年

十一月 九 日 陣 定 ありて 官 府 とも され 平

け物造より寸許此山に在りたるがらんといふは
 又宇治郡少小郡栗栖野ありと云ふは
 八幡山 花鳥の歌集人の文書に於てよく
 栗栖野と云ふありと云ふは流石に金言に
 此をよきもの多しとて中世といふは
 度されば栗栖野といふは
 科の勅修寺の事と

めまじりもいれえりてせはり
 花鳥の
 夕方よきと云ふは
 何は撰

人の物といふは
 人の物といふは
 人の物といふは

ひり物造ありと云ふは
 宇治郡

後拾遺二十能潜部より系大政大臣の
 人代ひとりと云ふは
 宇治郡

のらぬくそてあしにてほむらふよめあは

そのあはれちあはらうとぞうらうとまけは後世にひら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

あつたすつこのりつら

諺外傳カクシ守株同兔モトナカニウツクサウサギとありて、軟カクく竹取物

語れらむ云竹取翁タケノコの野山ノノとて竹とらてりて

よれりて、りの光竹ヒカルあり、竹中タケナカとて、

まはら守モリとらりて、女メぬらりて、ありて、

家イヘよりちて、まらりて、竹タケよるは、翁オノとて、

毎ヒトよ金カネあり、竹タケとらりて、翁オノとて、

くぬらり、ゆユ小女コメ成ナリて、白シロ世セとて、屋ヤ内ウチ

くらり、翁オノとて、光ヒカル満ミツとらり、翁オノとて、刺サシ竹タケのノく、

付ツキり、翁オノとて、年トシ七ナナ中ナカあり、翁オノとて、

禪録ゼンロク檀郎タンロウとらり、翁オノとて、得エて、晝ヒル夜ヨ婦メ

とまらり、翁オノとて、世セ事ジとて、打ウて、翁オノとて、

或アル時トキ翁オノ人のノ翁オノとて、翁オノとて、

翁オノとて、翁オノとて、翁オノとて、

翁オノとて、翁オノとて、翁オノとて、

翁オノとて、翁オノとて、翁オノとて、

翁オノとて、翁オノとて、翁オノとて、

翁オノとて、翁オノとて、翁オノとて、

翁オノとて、翁オノとて、翁オノとて、

翁オノとて、翁オノとて、翁オノとて、

以下白く言はれ女三まふまはるしをよのねむ
らふとあり

ねよらんこもいそ

かみせふまかみふまのふらあひまはれ
女の人さうりともふりさうりくちまうけま
さるると 史記曰忠臣不事二君貞女不更

二夫

壇あがらて海うらんよのめりなくあく佛もつ
らかり行ふ あふ大日如来さうりごと

しつりまをまがてさうかくあまうかんを

しつてはあまのふりすはあまの
うゆんといあし首尾也これ定業ふは

まの験あり

何よ我ふ人けりこの業とのうらん

まじふれあし一帯中れあまのうらんとい
つるも也

西れひさしとやけしと

國史云延暦五十代八年十二月皇太后宮崩天皇

錫行避正殿御西廂寧皇太子及群臣錫行

錫行法名也幸服二等以上親喪服錫行外

祖父毎モ亦同シク

命はくらのよめおつじと

命はくらのよめおつじと物あつじに死なはせしむるはづらひのうら

いさしむるわらわしむる人消るる病も

消るる病を消やらぬ病

我が病の消るる病も消るる病も消るる病も

消るる病も消るる病も消るる病も

消るる病も消るる病も消るる病も消るる病も

我とくわやと

秋の病も消るる病も消るる病も消るる病も

里と山と小野の志原

里と山と小野の志原 志原と山と小野の志原

國の名を定 決定集

山城の志原と小野の志原と山と小野の志原

志原と山と小野の志原と山と小野の志原

志原と山と小野の志原と山と小野の志原

志原と山と小野の志原と山と小野の志原

志原と山と小野の志原と山と小野の志原

志原と山と小野の志原と山と小野の志原

志原と山と小野の志原と山と小野の志原

何 多に人の影をみぬや水は流る海をわたりて
 さらさらと流るるやよあけぬよの夏をわたりて
 小野より女をみたり夕暮の夕暮り
 今この海をわたりて 炎をわたりて
 ちひよ海をわたりて 人々をわたりて
 唯しやうとさき初とてけて女をわたりて
 さらさらと流るるや

人のうめたるやのせむらひのうめたるや
 人のうめたるやのせむらひのうめたるや

夕暮のなるとれすと慚愧の初と
 夕暮のなるとれすと慚愧の初と

法句經曰防意如城と 均 七句居句二切也 齊也

朱元晦敬齋箴 何晦夫註云意在乎色則内作
 色荒意在乎禽則外作禽荒心猿意馬非有以防
 閑之而感失其所防焉則何処不至必防吾意如
 防城則外邪莫攻矣

定家釋無言太子波羅奈王之太子其名休魄容

定家釋無言太子波羅奈王之太子其名休魄容

端正生而十三年不言人不聞聲諸臣婆羅門道士等詭謗地下作城欲理之時大臣伏其車前重悲此事太子云我得不言生而欲理將言怖入地獄自全身不容欲救視矇苦謗我不言者皆欲生聾聵于時国王未人行迎太子太子曰我首先身為國王以正道雖治國有窮過法墮地獄六萬餘歲苦難忍我怖地獄全卷舌不言遂請出家父母聞之許之入深山末道命終生兜率天太子者釋尊也無言童子經曰爾時城中師子將軍第一夫人孕有德男天於虛空唱大音聲告之曰童子汝當懷

抱道教思惟經典慎莫言說世云言談曉了方便度世之法妙言勸辭捨身俗事當敏正義不取羨辭嚴飾之說童子遂聞如是音教未曾啼泣亦不出聲初不自現嬰兒之相至于七日顏自悅豫無有顧親眾人未觀視之者無狀或有人言此兒無用為育養又女名曰是也隨宿吾當育之所以者何今觀此兒威容顏自端正殊妙巍巍難量非是凡庸之所能及實不虛妄於時父母親屬知識見兒無聲因苦字之号曰無言於夏無言童子漸遂長大至于八歲見孝經并大集經

次廣海之志多々煙以をくさるるかたむひり
けりとも久しう

か

師云カニ
信長恨歌傳

念記 遊仙窟

形見 コレハ方葉ガキニ

海の子ガ心しうん

丹後國風土記曰早部首等首在姓先祖名三箇川

興子為入姿容者羨風流無類斯所謂水江浦興

子者也長谷朝倉宮御宇天皇御世興子獨采小

船沈於海中為釣汪三日三夜不得一魚乃得五

色龜心思奇異置干船中即寐忽為婦人其容養

麗更不可比興子問曰个宅遙遠海邊人乏誰人

忽采女娘微笑對曰風流之士獨不勝近談就凡

雲未興子復問曰凡雲何処未女娘答曰天上仙

家人也君宜迴禱赴干蓬山興子從往女娘教令

眠目即不意之間至海中博大之嶋其地如敷玉

其為歡宴万倍人間於茲不知日暮但黃昏之時

群仙侶等漸々退散即女娘獨留双肩接袖成夫

婦之理于時興子遺舊俗遊仙都既迨三歲忽起

懷土之心女娘拭淚歎曰意等金石共期万歳何

眷卿里棄遺一時即相携徘徊相談慟哀遂接袂

退去^キ去^ル女^メ娘^ヲ取^リ王^ノ匣^ヲ授^ケ興^ニ子^ト謂^フ曰^ク君^ニ終^ニ不^レ遺^ス賤^キ妾^ノ有^リ
 眷^ニ尋^ル者^ハ堅^ク握^ル匣^ヲ慎^ミ莫^ク開^キ見^ル即^チ相^分分^ル乘^ル船^ニ仍^テ教^ヘ令^シ眠^ス
 自^ラ忽^ニ到^リ本^土爰^ニ問^フ鄉^人曰^ク水^江浦^興子^ノ之^カ家^人今^ニ
 在^ル何^レ處^ニ鄉^人答^テ曰^ク吾^等聞^ク古^老等^ヲ相^傳傳^テ曰^ク先^世有^リ水^江
 浦^興子^ノ獨^リ遊^ブ蒼^海復^シ不^レ還^ル來^ニ今^ニ經^ル三^百餘^歳者^{ナリ}
 何^レ忽^ニ問^フ此^事乃^チ撫^テ玉^匣而^テ感^シ思^フ神^女於^テ興^子志^ヲ忘^ル前^ニ
 日^期忽^ニ開^キ玉^匣即^チ未^ダ瞻^ミ之^間芳^蘭之^體率^テ干^風雲^ニ
 翩^ニ飛^ビ蒼^天于^斯扶^海舟^ノ日^等許^シ余^ヲ華^雨又^ク母^多智^和
 和^多留^彦頭^能磨^能宇^良志^麻能^古賀^許等^母知^和
 和^多留^神女^送飛^音音^哥曰^ク夜^夜麻^等華^余加^是布^和
 企^河義^天久^母波^奈礼^所企^遠理^等母^等与^和遠^和須^良
 良^須奈^師浦^鴻子^乃匣^の乃^方葉^九卷^乃奇^は

春^乃日^の霞^めり^時ふ 聖^吉乃^岸ふ^出舟^へ
 釣^舟乃^遠ふ^なれ い^めの^りぞ^えゆ^る
 水^のに^れ浦^鴻の^思が 堅^莫釣^艸釣^鈴了^し
 及^七日^家に^来ず^海界^とる^そ擲^行よ
 海^若乃^神は^女 邂^りい^ゆさ^ゆら^い
 か^さの^ひの^る成^りぶ か^まら^れ取^り取^り
 こ^ごつ^たれ 神^の志^乃か^のへ^れ妙^{なる}殿^よ
 幸^づさ^らり 考^もせ^ど死^にほ^どく^永世^へ

五々々々々々 世中の 愚人の ことの子は
 けてけけけ 志づけけ 家に入りて 父母より
 みるびらみ あはれと 我きまを いひかれが
 妹がうつく ことよよ 子ぬきそ 今日のおと
 せんをあらハ け相成 ひふかゆと せこらくよ
 思ふこと 思ふこと 悔りありて 家へんれど
 家も思ふ 里みまじど 里も思ふて あやめど
 ことふさり 家を出て 三年の程 悔もぬく
 家の滅めを け彩を 用てんてハ 年の如
 家へんれと 玉匣 小披り 白き思ふ

彩より出 常世も宗 棚川去 立ちて
 よげび神あり 伏まらび 是むらき 願
 情消失 若有り 坡もぬぬ 黒くわ
 髪も白怪ぬ ゆあけハ いまは地て ぼつのおふ
 命とよなる 水は思 ころけの 家地んバ
 日本記は雄略天皇廿二年秋七月の事よんえ
 ころり浦嶋子舟小舟くく泊しふよ大なる亀とえ
 たり其亀化して女とあり浦嶋子の妻とぬる
 その妻に隠して海よ入て遠茅山よむる也云
 日本記は神代天皇より四十二代文武天皇迄と記

或云四十四代元正天皇養老四年五月亦一日ニ薨^スト云
雄略ノ廿二年ヨリ養老四年迄二百三十七年也^{雄略}
^{廿二年ヨリ文武}終^ニ迄^ハ二百三十四年^ニ
風土記ニ入^テ仙那^ニ三年ヲ經^ル間
ト思ヒシニ三百余歳ヲ經^ルト云ル不審^シ

八雲御抄云浦嶋ガ子仙那小入^テ父母と云^フ一^ク
心^ハ以^テ妻小服^トを^シと^シ玉匣^ヲを授^ケて^二度^ハ小^入
ま^ニと^シつ^テ箱とあけ^テふ^ルと云故郷へ^歸ら^ズ
れ^ノ丸^ヲ指^シけ^テ箱の中^ニ小^入せ^レる^ヤの^事
ふ^ク少^天入^ルま^シは^レ白^雲出^テ常^世迄^ノ方^へか^び
く^程不^成白^髮と^れり^海ま^し大^婆と^なる^けれ^ど
と^あけ^どハ^二度^ハ仙^那へ^入る^事を^いひ^用て^悔一^キ
ま^し事^ふは^らぬ^の事^ふら^ぬ

ま^は浦^嶋ガ^子仙^那箱^あけ^わら^うか^くは^けて^くも^ん
い^んん^んの^形一^と箱^あけ^て白^の箱^あけ^られ^る事^も
お^うと^あり 實^枝云^ふ如^しけ^ハハ^チこれ^も女^二の^ま
か^く侘^びた^らぬ^こと^あり^り也^也父^母の^心の^結ハ^ハ
女^二の^ま乃^もと^あり 細^流の^事ハ^ハ結^ハハ^ハ
心^ハタ^ラせ^る事^もい^はれ^られ^る事^もい^はれ^られ^る事^も
心^ハの^心ら^ず一^と結^ハハ^ハ 新^古今^ナす^まい^ハ人^トも^も
心^ハの^心ら^ず一^と結^ハハ^ハ 新^古今^ナす^まい^ハ人^トも^も

たゞしきつゝてめづらかり

河 ありぬやと心みそら遠いぬぬり中道よりなぞは遠い

元之と物さしぬ中よ

河 元之と物さしぬ中よ世中とあり一がられ物かさるん

なまふのこけきりらあふらん

村島ぬさし我ら今ふまうとのぬえさう一ありぬや

さよみ叶らぬ時あそむる家許さるゝもさうかなり

河 世の中はたぬふらぬさうさるべしおれをさへ遠くありぬや

多と控ておれぬを命下うこれらのさうまや道漱

道漱道漱は平太代一糸院の可代人なり

ふさうりーぬ け初史前生は夜の白は也

たうぬわーきんて け奇初斗へ

河 意うまはたぬかお世中の常あり物といひるすれ

ふたがらぬのたらんわーさういふとてゆふぬえ乃

名こそ傍されぬ也

心為卷名源氏五十一歳の暮より秋をり事

みま

さひるげせまらんものこ

心海ふささぐわふあまらるるはなみゆか

後の世もいなり蓮のぞ成りまんと

河 一々池中花盡浦 華々惣是往生人

各留半座乘花臺 待我閻浮同行人 法照禪師 五會讚

さふいそのみ乃よへり心

花 いそれりこはあきけと云こりや

ちりひちれ世れと救ありてさひあつてさふい

け奇の五百塵點劫とは華よ流ふん

仏のあつてりるのありさ海をり

觀經 曰く阿弥陀仏去此不遠

あささるる家れものさんごんの心

法華經五卷提婆品云 採薪及菓蔬隨時恭敬

と

法華經 三十一卷 大僧正行基

あまれ日暮人影とををてけつ又文を唱て

讃嘆 さらり

あかぬはれあがもはりそ新つまのんすはは

これ身よ孫薪及菓蒺れ菓とりせり

入無餘涅槃如薪盡火滅

あかぬはれあがもはりそ新つまのんすはは

は華經ノ五卷提婆品云孫薪及水薪薪設食了

時奉事經於千歳

とて子歳まで給けり

と娘とてあせれ給り

あかぬはれあがもはりそ新つまのんすはは

陵王と云 羅陵王 古樂有舞中曲舞次第

先小乱聲次乱聲次囀三度

序噴盛 次音取次荒序次入破次安摩子急

應安三年三月八日九近將監豊原莫秋

年端牛於 御前寫之

あかぬはれあがもはりそ新つまのんすはは

ちざりを 第 孔我生と見流公世垣聞深妙

典 此は身よとてり園法の値遇に生よとて

まよ今白縁と流われも男の流りも

終りどまよと下のら花散里へお

あまののみと流りんと也

右ふらりん

行幸儀北山抄云六府次

將以下一員近侍供奉其外又司中少將

者常侍前儀入御之後公卿各對面又同回之

諸衛不脱弓箭著御食座矣

名謂行啓此時あり行啓は先寢殿へあよりて

は案の上も各對面し侍をよれ公卿などの名をす

とせしむる也

ありしよりてせしむるもかたけけりしむる

ありしよりてせしむるもかたけけりしむる

中を寢殿をてけりし時のは案の上乃て河を以

てありしよりてせしむるもかたけけりしむる

とて中を寢殿をてけりし時のは案の上乃て河を以

てありしよりてせしむるもかたけけりしむる

とて中を寢殿をてけりし時のは案の上乃て河を以

み換徑ありしよりてせしむるもかたけけりしむる

不審抄出云中を寢殿をてけりし時のは案の上乃て河を以

てありしよりてせしむるもかたけけりしむる

とて中を寢殿をてけりし時のは案の上乃て河を以

佛ありてありて

何は華淫曰若人敬此

心乃至于一華供養於畫像漸見無數佛

畫五音ハ五ノミト音ト曰キ之 應ノ韻ニ入ラクテノ音ノ

仏の橋の影をさしこみて後世を人さす

おそれた言ひなきおぼろに佛の影

と家ありて心斗あがさ家へ秋風ありて

何秋吹らるる風のきかれおぼろに

いそりそめよ世成るに

何物ありては山回らそめよに

おもむきし清き水も家ありて

何来り流りの水や世に

おもむきし清き水も家ありて

秋風よさうさうぬ家ありて

何病ありておぼろに

かしてあせよと

何たのひに今に

のろよと

何うらやうら

一日一夜うらやうの

何観經曰一日一夜受持八戒

は約とらうて風物念仏と記して 定家

西とらう海とて記されあつた秋は長月

身とらう海りもぬまひさ 初より行

後將 後將 りのせられさるればは物身とてせぬ世と

うすもきとのほりしとて海屋とて 不審抄也

云ぞし養ふは 養巻よらせ給へ時海氏をたの服

の時れ奇中

海つあれ海軍書衣漬をれば海を神と記するから

海つあまづらひは家のもの今世よのうせ給へ時

海つあまづらひは家のもの今世よのうせ給へ時

海つあまづらひは家のもの今世よのうせ給へ時

令弟九日 令弟九日 自らたみ毎夫服一年とて夫死は服

五年の忌服は一年とて夫死は服とて養巻

は海氏別を我ら給はたすしうは給へくは深

給へしとらう書るはとらう等とて云服の

忌服は三月とてとて服とて

めてたさくもあいかう大この世母さぬまは給

善人とい不善人乃そねと少くじとの善人あ

ら道不善人よはくまうしと善人よのよよ上ト

百人よりあし海り老人とは親のくく一友とい

と身れし〜お者の子の〜賢と〜
と愚とらぢむ人〜

のちう〜やぬぢ〜も然うるよわも〜

実徳の云け奇〜
我が厭〜つら〜顧〜

け〜動〜く〜面〜白〜ま〜

今〜や〜の〜こ〜も〜才〜も〜ら〜づ〜

惚〜く〜も〜物〜ぶ〜ら〜る〜と〜才〜今〜や〜我〜世〜乃〜所〜ら〜る〜足

幻 二五

等為巻名源氏八十二歳の三月より四月

十二月とすら

去れえを〜ら〜後〜よ〜つ〜け〜

百子る〜物〜ま〜い〜物〜ま〜い〜物〜ま〜い〜

我者〜た〜も〜て〜も〜や〜と〜く〜

何れ〜母〜菊〜と〜深〜く〜て〜白〜く〜ん〜花〜り〜

こ〜道〜ら〜う〜ゆ〜く〜母〜人〜も〜や〜と〜く〜

は〜こ〜も〜ら〜う〜し〜も〜い〜め〜ぬ〜揚〜む〜

室〜う〜ら〜う〜〜〜曉〜も〜ま〜な〜と〜

百愛世よいけれまごまのりつるまののあやめあふ
袖のまがくくもせよあふご

花き川へのらに流され袖のまがくくいつのまごし
うあひ松よあやえくらまをり

文選 曰馬鬣松青菴と仍覺云文選ニハナキトク
鬣ハ長鬣也 水京抄云大國ニハ人ノ墓ノシルニ

小松ヲ双テ植ルニ禮記ニ馬鬣ハ墓ノシリアリ
文選ヨ馬鬣松ト云クうあひ松といよみ侍

馬鬣ハ墓ノシリアリ 松ト云ク
うあひ松といよみ侍

ひ松といふり松ハ塚れ松をまじ人の形んと云
がしゆく申將のまはあしれ形んと云

うとまじんかハ文よらんえ松と云
文集上陽人曰外人不見々應矣

涙のぬれまうはなれど
是は流れ君が紋にやまわれや涙は涙るるのま

あのかり〜うがて對のあまののま
言ハ云事流よそのの〜は事上れニ事流と云ま

ゆつろ〜まは事よま〜まは事よま
まよは事よま〜まは事よま

らそんあらしの神もよき候を風は垣也
此の文の省ぐまのしをさうとれんは奇なるもの
もまよれはくはか

とげののりゆもまよのほのされは神もあ
して無候とまよ

から服之月とまよはは衣の凶服たりとまよ
老を臣あし着ては海也も次磨してまよ

別々の着服なりとまよはは衣の
海也もあはくは服と着たりとまよ

ゆりふ明年のまよとまよはは衣の
ハ餘衣也とまよはは衣の

志はらと平服と志はらと青式部卿重明
親王延喜帝は海也

除るも和之年のるは私の衣裳は後羅美也
着せど合衣也とまよはは衣の

みはら私れ志はらの外はらとまよ
まよこのまよ

桑後とみはら
董て実校のまよ

ふらふらふらふらふら

とてあはれなる人なることあり歎のなること

とせりしやうがもせりんとしやうあはれなること

とてあはれなることあり歎のなること

とせりしやうがもせりんとしやうあはれなること

とてあはれなることあり歎のなること

とせりしやうがもせりんとしやうあはれなること

とてあはれなることあり歎のなること

とせりしやうがもせりんとしやうあはれなること

とてあはれなることあり歎のなること

とせりしやうがもせりんとしやうあはれなること

とてあはれなることあり歎のなること

とてあはれなることあり歎のなること

とてあはれなることあり歎のなること

とてあはれなることあり歎のなること

とてあはれなることあり歎のなること

とてあはれなることあり歎のなること

とてあはれなることあり歎のなること

とてあはれなることあり歎のなること

とてあはれなることあり歎のなること

とてあはれなることあり歎のなること

とてあはれなることあり歎のなること

は流りして仏泉の裏とらふけしとて

他のうらとれさうらうらとるるは
可 長恨歌傳曰

時移事去樂盡此年每至春之日冬之秋池蓮葉

閉宮櫻秋落

つみあをうらむ
極東の蓮をさひやうけしと

は照夜所の五會讚曰一と池中華盡滿華と

是世生人のこ

まきこのまきとまきうのまき

我のまきとまきうらむまきとまきうのまき

は寺のまきとまきうらむまきとまきうのまき

我ざりあはしとまきとまきとまきとまきと

寺のまきとまきうらむまきとまきと

つとて我のまきとまきうらむまきとまきと

日徳とまきのまきとまきうらむまきとまきと

公事清まきとまきうらむまきとまきと

かまきとまきのまきとまきうらむまきとまきと

まきとまきのまきとまきうらむまきとまきと

かまきとまきのまきとまきうらむまきとまきと

夕殿まきとまきと

夕殿螢飛思悄然ニセウゼンガリ 孤燈挑盡未能眠コトウチカゲツクタ 長恨歌ハルナガレカ

よ海を志海河らとんそし 海氏のさひひりも消さ

ふと也 花ケニカ 兼葭水暗螢知夜カキヤミ 朗詠 許渾作

コノ夜ハ常ニ晴キ所ナルニ螢ノ照テ夜ヲ知ルトナリ

又螢ハ夜ヲ知テ照ストク

七夕タタヒあきこむれもさかしくしと道ミチの存ゾクを感カぞとるト 海氏

夏夜を多感ハそ居送ユクしては案ア下カ別ワ一ト時トの心ココロ

絶せざればと也

風のきこくくあはらむらゆい

三秋アキの夜中ヨナカすききとくあはれ秋アキの風カゼ乃ナも露ツキ

今イマもて強ツヨクもく月ツキ日はとあはれと

酒人の身ミをあはらり物モノを今イマまでかかすもあはれをさる

君キミもあはれいさるさるのよきよき行ユキのよきとあはれ 中お

神カミ身ミをぬきしあはれつとせ移ウツリも助タケもとくともいさるから

九日クニチはあはれいさる朝アサ露ツキ 奇オドロクけ故コト事コト可カ動カ

仰云トク菊キクれをせよとと藻シロ塩シホ若ワカのあもあはれ今イマの世ヨの世ヨの持モチ事コト

して文フミ女メもりら乃ナとくもん九月クニチ八ヤツ日のヒの映ハ菊キク乃ナ

花ハナふさぎも母ハハたのちもみ海ウミもよらうとくもい

あはれもよのさ白シロ赤アカ黄キウ抄セウ葉エフ染シメたタとくも也ナ 九日クニチれ

り

りる凡よ初にのー菊の白あも 乃あよあ

後撰
乃あよあ初にのー菊の白あも 乃あよあ

乃あよあ初にのー菊の白あも

後撰
乃あよあ初にのー菊の白あも

乃あよあ初にのー菊の白あも

乃あよあ初にのー菊の白あも

乃あよあ初にのー菊の白あも 實校の序と押して幻

術のち母比よりや幻術の士に成りしをさうさ

とさうさ 蜀守が揚首死よるあひし

也方士の術士のあひし方士が徳をさうさ

寄事雷れととさうさ

又節 十一月中世日よりさうさ之辰の日正日也

小忌としてま揃れととさうさ 新嘗會の十一

月中の節日也 云事根原云新嘗會の

今年乃初指と種よさしせは小後し所代の

始のい大嘗會とらふ毎年年乃の新嘗會と

也上食れく揃長日陰と着と 取要

乃云十一月中夜日豊明節會也今年れ種と種

よさしせは今乃のさうさのさうさ

に節のさうさ新嘗會のさうさ上御室相辨など

山藍やまあいもて柳やなぎ流なが水みづとよまきまきのうらまはうらまは今いまりま
うふりうふりしく青あお柳やなぎを月つきう五ご萬まん舞ま舞まののあありりみ
交まじ神かみををううくくうう入いるる 西にし宮みや

ううくくああややううりりしし日ひ落おれれかかりり 新あらた染ぞめれれ又また染ぞめりりが

るるくく大おほ事こと大おほ貳ふたがが女むすめとと系けい事ことよよあありり源げん流りゅうたた匠しやうの

町まちのの事こと法はふしし源げん氏し物ものををううぐぐううくくままううははききゆゆん

けけ比ひののめめ高たかれれおおりり付つけけててううみみああららううりり日ひ落おれれととい

ぬぬききととううくくののどどくくととううふふとと日ひ落おれれううくくととうう

くくととううとと他たへへててああととししととびびてて日ひ落おれれううくくとと

作つくてて用もちひひ

今いまりりとと母ははととうう流ながれれよよ美みたたちちくく 実まこと枝えだ云い暖ぬく減へ

院いん隱いん居ぐのの事こと事こと定さだ法はふ美みよよあありりててかからら

庭にわののああととわわががさされれららううやや

ややままおおれれ庭にわ縁えん人ひとよようう平へい流りゅうくくををれれははははららうう

ううままののああののここととううききつつななりりううららううままととああぬぬをを

いいままののここ

かかひひあありりとと志しひひ家け流りゅうをを水みづ藍あいのの流ながれれととああせせらら形かたち人ひとくくうう

事こと流りゅうのの流ながれれととああせせららままたたしし意いとと思おもひひ人ひとややたたりりんん

けけすすののああののここととああせせららままたたしし意いとと思おもひひ人ひとややたたりりんん

ううままののああののここととああせせららままたたしし意いとと思おもひひ人ひとややたたりりんん

幸月巻十五

四

よるをりよりののりつとふとす

洛陽のちひあまのの水をよるは

涕子翰俱悲歎且吟曰黃壤誰知我自頭徒念君

唯將光年淚一灑故人文 白樂天

黃壤上の黄泉之迷途ノ一

志ての山さふしとささるて終とつとねまを

志ての山麓とみてとゆりしつとささるて終とつとねまを

志ての山ささるて終とつとねまを

或説云志ての山四天の周也みは五通と

志て凡十王徑文云死天山内集鬼神

石の法とんつとゆりしと今ゆく末法に母せり

佛の事根原抄云三世諸佛のぬきを唱て六

根の泥と減とらんて佛の徳より徳とらん

さりのて變毫光にわ年十二月十九日始之兼和

仁乃 此は毎年佛在ニケ日れるハ法國にて殺生

禁断のり一格とんつとらん十二月十九日より三ケ日也

今ハ撰是るりて名謂あり所衆説はよる皆

名の系拍撃の勅をよるりてわらりて

子傳府れ解子指別拍撃をよるりて

て歸とすて勅をよるり 或云天長七年

十二月始有佛名（平賀の）貞観格云々（府省）及官府（府省）應行（府省）

佛名懺悔事（平賀の）貞観格十二卷アリ五十（平賀の）

天仁（平賀の）弘仁十一年ヨリ五十六代清和天皇ノ

貞観十年ニテ四十九年ノ事ヲ記ス（三千佛ノ名ヲ唱ル事）

元亨釋書九卷感進部曰釋靜安法相之比良（平賀の）

十二佛名經ヨム且聲帝（平賀の）聞工兼和（平賀の）仁明九年

奏シテ宮中ニ季冬（平賀の）弘名懺（平賀の）ヲ至也

錫杖（平賀の）ハ云々ニテ夜（平賀の）ヨワケリ錫杖（平賀の）経（平賀の）トヨアリ

道師（平賀の）ノマウヅ（平賀の）ト云々（平賀の）トテ蓋（平賀の）アリ

都（平賀の）中將和氣其以持津（平賀の）回栢梨（平賀の）庄（平賀の）等（平賀の）た道府

官人（平賀の）ノ而抄（平賀の）ヨアセ（平賀の）トリ（平賀の）トシ（平賀の）トテ佛名（平賀の）此表（平賀の）た

を府（平賀の）トテ勅（平賀の）至（平賀の）ル（平賀の）トアリ

ろく（平賀の）と云々（平賀の）延喜（平賀の）死（平賀の）研（平賀の）十九年佛名（平賀の）道師（平賀の）

之（平賀の）體（平賀の）津（平賀の）師（平賀の）賜（平賀の）御（平賀の）河（平賀の）古（平賀の）女（平賀の）天（平賀の）曆（平賀の）廿（平賀の）四年佛名（平賀の）道師（平賀の）

苑（平賀の）青（平賀の）所（平賀の）ト云々（平賀の）此（平賀の）表（平賀の）た

の例（平賀の）ト云々

道師（平賀の）ノ（平賀の）一（平賀の）爐（平賀の）燈（平賀の）一（平賀の）盞（平賀の）白（平賀の）頭（平賀の）夜（平賀の）禮（平賀の）佛（平賀の）名（平賀の）經（平賀の）白（平賀の）天（平賀の）

コ（平賀の）ハ（平賀の）下（平賀の）部（平賀の）一（平賀の）盞（平賀の）シ（平賀の）人（平賀の）毎（平賀の）二（平賀の）前（平賀の）置（平賀の）之（平賀の）白（平賀の）頭（平賀の）ハ（平賀の）老（平賀の）僧（平賀の）ト

何ゆゑにわらわしき

鄂曲あはれのうた

此國の歌うた歌うたのうた
一して一いと鄂曲あはれのうた

まよふの命いのちのうた

佛ほとけのうた

ふとふあり

何

三条右大臣みよののうた

二月九日ふたつきのうた

まよふの命いのちのうた

てはまのうた

奏うたのうた

吉よのうた

あはれあはれのうた

昔むかしの集あつのうた

まよふの命いのちのうた

まよふの命いのちのうた

梅うめのうた

まよふの命いのちのうた

爆竹はなびのうた

十二月じふにがつのうた

流ながのうた

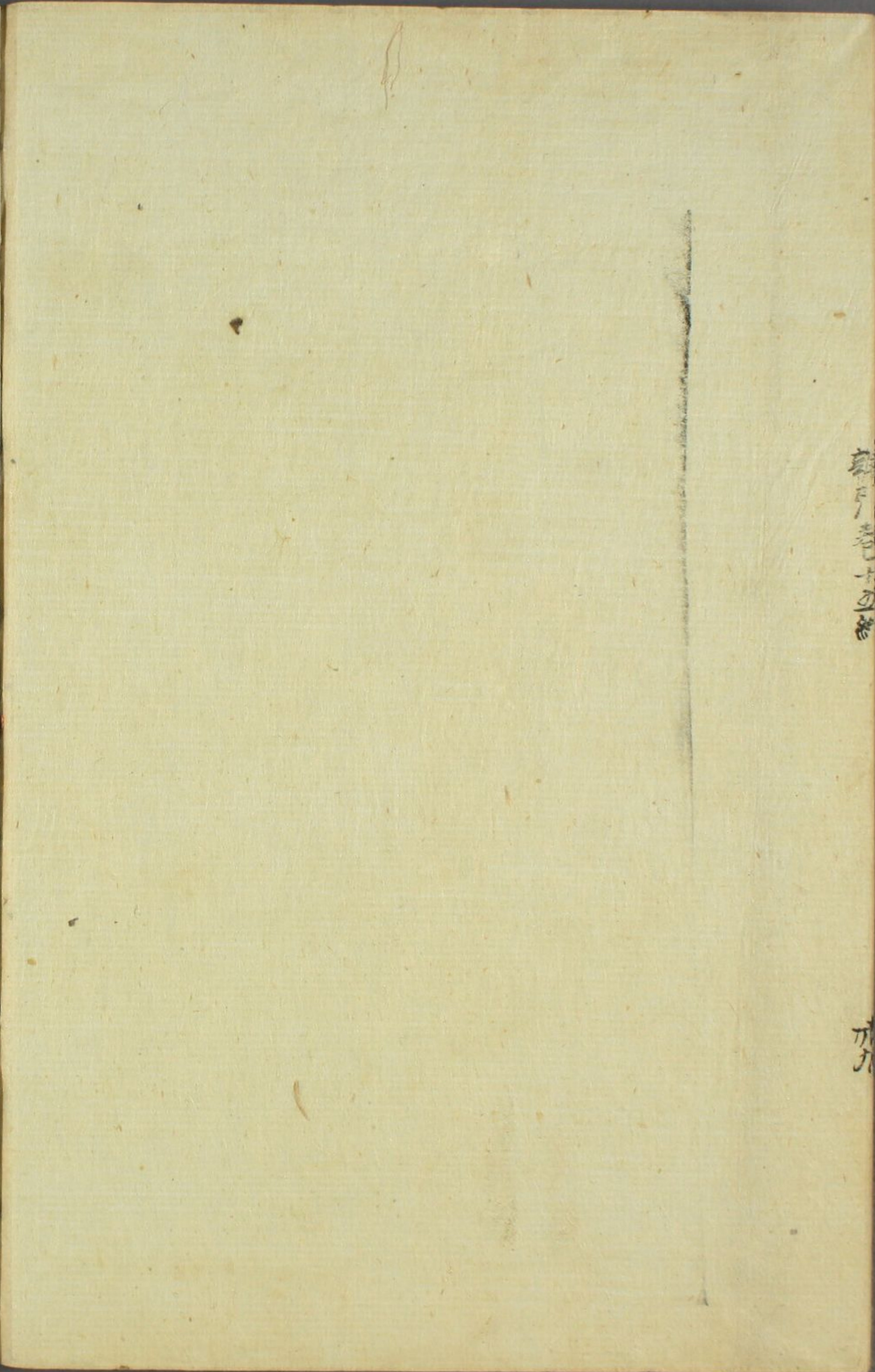
南みなみのうた

殿上人も御殿此方より立て柳弓葺矢を
 射つ川よりも今夜御舟は燈をかりく
 りりと身を危れ御船臺盤所の前より灯
 巻と浮舟くもそとそとと追船とてさ
 年中の夜更しと拂ふ心と鬼とて方お氏乃
 りの四月ありてあきほけある面をさして
 小指牙とりの又浪子（主殿兵）とて世人の御
 衣巻とら者と率一して内書書の四門より
 慶之（平次）二年十月よりあつは年天下より
 わり疲痛（主殿兵）に惚れたりしれし度文選兵（追兵）

朝日此極のり

天子とて小朝日とて下院帝

といひ移れとらふ海民は天上天をされんく
 移れよといひつるは



新刊 卷之十四

九

